

IV 研究のまとめ

1 研究を振り返って

(1) 研究授業の成果と課題 (○: 成果 ●: 課題)

学習基盤・授業構想

- 本市の目指す子ども像について指導委員全員で検討したことにより、イメージを共有して研究を進めることができた。
- アンケート等を実施・分析し、子どもの実態、教師の課題を踏まえた手立てを設定できた。
- 学級の実態に応じて単元計画を見直した。既習事項を活用する時間が確保でき、定着につながった。

- 自分が担当する子どもを具体的にイメージした評価基準について、吟味する必要があった。
- 学習指導要領の読み取りの深さ、教材研究の深さに課題があった。
- 研究授業への見通しが甘く、実施日程や指導案作成が後ろにずれてしまった。
- 人間関係によって協働的な学びが停滞する場面があった。

⇒ 指導委員会で、「本市の目指す子ども」の具体的な姿について時間をかけて検討した結果、テーマを個々の研究に落とし込むことができた。共同研究においては、全員が一つの目標に向かうようイメージを共有し、それぞれが子どもの実態を踏まえた具体的な研究構想を立てることが大切である。

また、安心して学習できる環境の下でこそ協働的な学びが充実したものになる。日頃の学級づくりが、学習の基盤として重要であることは言うまでもない。

学習課題との把握

- 身近な課題、知的好奇心を揺さぶる課題の提示や発問により、課題を自分事として捉えて学習に取り組む姿が見られた。
- 予想や考察の場面で根拠をもって書かせることにより、考えを深めさせることができた。

- 子どもにとって、必要感・必然性のあるもの、問いや疑問が生まれるものになっていなかった。
- 子どもが捉えやすいものになっていなかった。

⇒ 子どもが主体的に学ぶためには、調べたくなる、やってみたくなる、学ぶ必然性のある学習対象（教材）の提示、学習課題（めあて）の設定が大切である。学習課題は、子どもが何を追究すればよいのか具体的にイメージでき、問いをもたせる表現にする。また、根拠を基に予想させるなど、追究・解決への見通しももたせたい。

追究・解決

- 問いをもたせる教師の働きかけにより、意欲的な対話など主体的に学ぶ姿が見られるようになった。
- 協働的な学びを通じた成功体験の積み重ねにより、課題解決への自信や挑戦する意欲が高まった。

- ねらいや焦点の当て方などを明確にした話し合いができなかった。
- 考えをつなげ、深めるコーディネートが不十分だった。
- デジタルとアナログの効果的な活用について研究する必要がある。

⇒ 子どもの話し合いの場面で、効果的なコーディネートを行うことに課題を感じている教師は少なくない。それは指導委員にとっても同様であることがうかがえる。コーディネートの主な目的は、思考や発言を促し、新たな問いをもたせて深めたり広げたりすることで、子どもが主体的に学ぶための原動力を生み出す大切な指導技術である。日頃から、子どもが中心になる授業、気づきを引き出す授業を心がけたい。

振り返り

- タイムマネジメントを意識して、振り返りの時間を確保した授業に心がけたことにより、学びを自分事として捉える姿が見られた。

- 自他のよさ、力の高まりが実感できる振り返り、次の授業につながる振り返りができなかった。

⇒ 主体的な学びを実現するためには、本時の学習に子ども自身がどのように関わり、何を学び、何ができるようになったのか、がんばったことは何か、友達によかったところは何か、もっと知りたいことや疑問なことはないかなど、自らの視点で学びを振り返ることが大切である。振り返りは主体性を伴う活動であり、自己を客観視する活動でもある。

指導委員の課題にも挙げられたように、適切なタイムマネジメントによる振り返りの時間の確保は、解決しなければならない課題である。視点を明確にした振り返りを通して、主体的な学びの実現を図りたい。

(2) 研究授業の意味 ～授業者として、参観者として～

■ 研究授業の目的を明確にする

- ・ 2回の研究授業で、指導主事の先生から授業の改善点などを指導していただいたことで、研究の視点が明確になり、内容を焦点化して第2回授業研究での 授業改善を図ることができた。
 - ⇒ 授業改善への気付きがあっても、改善策を検証する機会がなければ、手立ての有効性を確認できない。そのため、指導委員会では1回目の研究授業で指導担当者の参観を通して課題を明確にし、改善策を講じた2回目の研究授業でその検証を行った。目的の異なる2回の研究授業と、互見授業では得られない指導主事等による専門的かつ客観的な助言がポイントである。

■ 授業参観の機会を確保する

- ・ 学校訪問や互見授業で参観する貴重な機会をいただいたことで、授業づくりの視点が明確になるなど勉強になった。
- ・ 中学校の授業を参観し、事後研究会にも参加する機会をいただいた。小学校での学びがどのように生かされているかを知ることができた。
 - ⇒ 互見授業は手軽にできる研修の一つである。同じ研究教科、専門教科同士の視点で行ったり、他教科または他校種の視点を取り入れて行ったりするなど、互見授業の目的・ねらいを考えた互見授業を実施することが大切である。また、積極的に指導主事等の参観、指導・助言をいただく機会を設けるようにしたい。

■ 研究授業での学びを日々の授業に生かす

- ・ 1年間継続して、研究のテーマをもとに授業を実践できたことがよかった。1回目の授業で指導していただいたことを意識して、日々の授業を実践し、子どもに還元することができた。
- ・ 次年度は、学んだこと、発見できたことを同僚へ伝達できるように努めたい。
 - ⇒ 日々の研鑽が求められる教職にあって、「研究のための研究」になっていないか、自身の授業を振り返ることが大切である。研究授業が終わった解放感から、授業が以前の状態に戻ってしまったのではもったいない。授業研究を何のために行き、どのような子どもの育成を目指して研究を行ったのか、研究の原点に還って日々の授業実践に生かし、継続的に授業改善を進めるようにしたい。また、研究授業を通した各自の学びを職場全体で共有し、授業改善の風土を培っていくことが大切である。

2 おわりに

今年度の研究の特色は2つある。1つ目は、本市の目指す子ども像の実現に向け、指導委員が個別の視点で授業研究を進め、共同研究としてまとめる手法を採ったことである。共通の視点を設けず個別化したねらいは、研究を「自分事」として捉え、目の前の子どもに寄り添った授業改善により、指導委員各々が主体的に進めることにあった。個別の視点で研究を進める以上、目指す子どもの具体像を適切にイメージし、統一感のある研究にすることが求められた。そのため、その具体像を全員で検討し、出されたイメージを分類、共有することから研究がスタートした。

2つ目は、研究授業を2回行ったことである。前述したように、課題の洗い出しと改善策の検証という、目的の異なる2回の研究授業を位置付け、同僚とともに研鑽し合い、指導担当から専門的かつ客観的な助言を行うことで、授業力の向上を目指した。

これら、指導委員の研究の一端をまとめた本冊子が、本市教職員の授業改善の一助となり、本市の目指す子どもが一人でも多く成長することを切に願う。

(委員長 日下部準一)

令和5年度二本松市教育委員会指導委員会作成委員 (◎委員長 ○副委員長)

◎日下部準一 (東和中学校)	○菅野智香子 (二本松南小教頭)	
樽井奈緒子 (二本松南小)	中山 万由 (小浜中)	山本 雄太 (杉田小)
先崎 貴徳 (東和中)	野地 吾勝 (新殿小)	橋本 裕子 (安達中)
金澤 理洋 (小浜小)	本多 一雅 (岩代中)	本田 政史 (渡川小)
大沼 仁 (二本松三中)	遊佐久美子 (二本松二中)	渡邊 康貴 (東和小)
草野 洋一 (二本松一中)	阿部 理佳 (石井小)	山寺 晶子 (杉田小)
武田由香理 (二本松三中)	福本 拓人 (岳下小)	安齋 紀子 (とうわこども園)

令和5年度二本松市教育委員会作成委員

渡辺 惣吾 (教育長)	丹野 学 (前教育長)	太田 孝志 (学校教育課長)
長澤 潤 (管理係長)	藤原 謙 (指導係長)	大関 智幸 (指導主事)
奥山 満 (指導主事)	佐藤 和彦 (指導主事)	糺田 惣男 (指導主事)
須田 康仁 (指導主事)	糺田 祐子 (指導主事)	